

カンバルク 大都
—マルコ・ポーロの東方(3)¹—

高田 英樹

Canbaluc Daidu
—Orient of Marco Polo (3) —

Hideki Takata

キーワード

マルコ・ポーロ、カンバルク、大都、フビライ

0. はじめに

その書では、シャンドウ(上都)に至るまでの往路の部の後に続く三十章(Ch.76~105)は、グラン・カン・フビライの偉大とその都カンバルク大都の栄華に当てられる。対ナヤン戦の勝利から始まって宮殿・祭礼・都城から統治・狩猟・施政まで、大小の誤りと不正確と粗と雑を含みながらも、しかしそれを補って余りある大小の事実と正確と精と細を併せ持って、史料価値の最も高い部分である。全てがそうであるといっても過言ではないのだから、この部にも紙幣や駅伝システム等、歴史に残る記事が見える。現北京の原型を形作ったとされる、フビライによって建造されたばかりの大都カンバルクの都城と宮殿を華やかに描く箇所も、またその一つである。その最深部に位置する宮殿の奥にまで及ぶ筆の跡はまた、グラン・カンに寵愛されその側近くに仕えたという作者の自称を検証するに格好の部分でもある。

その都は、至元4年(1267年)に建設が始まり、10年掛って大城壁(外城)ができ、至元20年(1283年)には一応の完成を見たという。ポーロの上都着は1275年夏頃と見られるから、彼らはそれが建設されてゆくのを目の辺りにしたことになる。また1290年末か91年初に泉州から出帆するまで、使者として諸方に赴いたと言う時以外は、その地で多くの時を過ごしたことであろうとすれば、これら記事はそれの直接の目撃情報であり、かつ最も早いものとなる。今はいくつかの遺跡が残るのみですっかり姿を消してしまったが、明代その跡に建設されて今に続く北京の街と当時の復元図が、検証を援けてくれる。²

記述は、大君の宮殿(Ch.84) 大都の街(Ch.85) 城外地区(Ch.95)の三つの章に分かれてある。同書は、F系稿本とZ・Rで内容を様々に異にするが、ここでも例外ではなく、

* たかた ひでき: 大阪国際大学人間科学部非常勤講師〈2010.10.1受理〉

Rは多くの点でFと大きく異なる。名高いアフマド事件の記事(Ch.85-1)は、Rにしかない。Zはこの大都の部のほとんどを省略しているため、これらの章を持たない。他の主要稿本FG・TA・VA・Pは基本的にFと一致するため、特に注目すべき異なりのあるとき以外は取り上げない。したがってここでは、FとRを対校してその異同を検討する。これらの記事でのとりわけ大きくまた明瞭な異なりは、その因って来たるところとひいては本書の成立過程を推し量る好個の材料を提供する。テキストは、写本原文の転記はFのみとし、Rは印刷本のため和訳のみを掲げる(太字は相互の異なりを示す)。³

1. 宮殿 (Ch.84)

1) F : Bibl. Nationale de France, Paris, Ms.fr.1116 (f.38va24-39va14)⁴

Sachies tout uoiramant que le grant chan demore en la maistre uile dou catai,¹ cabaluc² est appellee, trois mois de l'an, c'est decebre³ & ienner & feurer. en ceste uile a son grant palais & uoç diuiserai sa faison.

el est tout auant un grant mur quares, qui est por chascun quare un milier, ce est a dire qu'il est tout enuiron quatre miles⁴. Il est mout gros & d'autesse ont il bien x pas; & sunt toutes blanches et merles. Et⁵ chascun cant de cest mur a un grant palais mout biaux & mout riches, el quelz se tient les hernois dou grant can, ce sont arç & tarcasci & seles & fren de cauaus & cordes d'arç & toutes chouses beçognables a oste. & ancore⁶ un paleis semblable a çelç des cant: si que sunt tout enuiron les murs viii⁷.

& tuit & viii sunt plein des arnois dou grant sire. & sachies que en chascun ne a que d'une chouse: ce est que en le un a arç e ne autres; &⁸ le⁹ auoit seles & ne autres; & ensi uait que en chascun a toute une chouses.

& cest mur a eu quare d'enuer midi v portes: eu mileu une grant part¹⁰, que ne s'eure nulle fois for tant solemant quant le grant¹¹ en hoisce¹² & quant il hi entre; & iouste ceste grant porte en a dues petite, de caschune part une, & por celle entrent toutes les autres iens. Et puis en a uer le¹³ chant un autre mout grant, & deuer l'autre chant un autres, por les queles entrent enchore les autres iens.

& dedens cest mur ha un autre mur que est auques plus lonc que large. il a ausint viii palais sor cest mures tout en tel mauneres com les autres; & encore hi se tinent dedens les hernois dou grant sire. il a ausi v portes eu quare dever midi toutes senblables a les autres mur deuant. Et en chascun autres quares a une sole porte et ausint ont les autres murs que dit uos ai.

Et en mileu de ceste mures est palais dou grant sire, qui est fait en tel mainere com ie uoç dirai. il est le greingnor que iames fust neu. il ne a pas soler, mes le pauiment est plus aut que l'autre tere entor x paumes. la coueure est mout autesme. les mur de les sales & de les canbres sunt toutes couertes d'or & d'argent & hi a portraites dragons & bestes & osiaus & ch'rs¹⁴ & autres deuerses ienerasion des bestes. & la couerture est ausi fate: si que ne i se pert autre que hor¹⁵ & pointures. la sale est si grant & si

larges que bien hi menuirent¹⁶ plus de vi^m homes. Il ha tantes chambres que c'en est muruoilles¹⁷ a uoir. il est si grant & si bien fait que ne a home au monde que le pooir en aust qu'il le seust miaus ordrer ne faire. & la coureture desoure sunt toute uermoille & uers & bloies & iaunes & de tous colors; & sunt envertree¹⁸ si bien & si soitilmant qu'il sunt respredisant¹⁹ come cristiaus, si que mou loingne enuiron le palais luisent²⁰. Et sachiez que cele coureure est si fort & si fermeement faite que dure maint anz.

& entre le un mur & les autres de celz que ie uoç ai contes, a praeries & biaux arbres es quelz ha plosors maineres de deuerses bestes: ce sunt cerf blances, les bestes que funt le moustre²¹, cauriol, daynes & uair, & de plosors maineres de belles bestes. & toutes les terres dedens les murs sunt plainnes des cestes beles bestes, for que les uoies dont les homes uont solament. Et de l'un chane d'enuer maistre a un lac mout grant eu quell a de plosors maineres de poison, car le grant sire hi a fait metre de maintes maineres poisonz, & toute le foies que le grant sire uelt de celz pesonz en a a sa uolunte. Et si uoç di que un grant flun hi met & hoisse²², mes si est si orders que nul poisson non poit hoissir²³. & ce est fait con rees de fer & de raim.

& encore uoç di que deuer traimontane, loinge²⁴ dou palais entor due²⁵ aralente²⁶ a fait fair²⁷ un tertre, ce est un mont, que bien est haut c pas & enuiron est plus d'un milles, qu'el²⁸ mont est tout plein & cout d'arbres que de nul tens perdent foies, mes toutes foies sunt uers. Et uoç di que le grant sire, que launques l'en li content que fust un biaux arbres, il le faisoit prendre con toutes le raices & con mout terre & le faisoit porter a cel mont con les leofant. & fust l'albre grant quant il uousisti, ²⁹ qu'il ne foist ce faire. Et en cest mainere hi auoit les plus arbres biaux³⁰ dou monde. Et uoç di que le grant sire ha fait courir tout cel mont de roçe³¹ de l'acur³², que est mout uers; si que les arbores sunt tuit uers, & le mont tout uers. Et ni a apert fort³³ que cose uers. & por ce est apelles le mont uers. Et desus le mont, eu mileu dou coume, a un palais biaux & grant, & est tout uers. Et uoç di que ceste mont & les arbres et les palais sunt biaux a regarder, que tout celz que le uoient en ont leesse & ioie. & por ce la a fait faire le grant sire por auoir celle belle uiste & por ce que li rede³⁴ confort & solas. [Benedetto: ¹ [que]

² Ca[n]baluc ³ dece[n]bre ⁴ milles ⁵ [en] ⁶ [eu mileu de chascun quare a] ⁷ [paleis] ⁸ [en] ⁹ [autre] ¹⁰ port ¹¹ [kan] ¹² oisce ¹³ [un] ¹⁴ chevaliers ¹⁵ or ¹⁶ menjurent ¹⁷ maruoilles ¹⁸ enuernicee ¹⁹ respredisant ²⁰ luisent ²¹ mouscre ²² oisse ²³ oissir ²⁴ loigne ²⁵ d'u[n]e ²⁶ ababestre (Moule:arbalestre) ²⁷ faire ²⁸ d'un mil, les quel ²⁹ [il ne lassoit] ³⁰ biaux arbres ³¹ roçe ³² açur ³³ E n'i apert for ³⁴ re[n]de] ⁵

「グラン・カンとはカ[ン]バルクというカタイの首都に一年の三か月、すなわち十二月・一月・二月と住まうことをよくご承知ください。この都に彼の大宮殿があるのですが、その様子を記しましょう。

まず最初に方形の大城壁があり、一辺それぞれ一マイル、すなわち全周四マイルある。とても

分厚く、高さは十パスもある。真っ白で、胸壁が付いている。この城壁のそれぞれの角にとても綺麗で豪華な楼があって、グラン・カンの武具が仕舞ってある。弓・籠・鞍・馬の轡・弓糸や軍に必要なもの全てである。さらに「各辺の中央に」角のと同じような楼がある。したがって城壁全周で八つの「楼」がある。八つとも大君の武具でいっぱいである。しかしそれぞれ一種類のものしか収めていない。つまり、ある楼には弓はあるが他のものはなく、「別のところ」には鞍があって他のものはないと、このようにそれぞれ全て一種類のものしかないのです。

この城壁は、南に面した辺に門が五つある。真ん中に大きな門があるが、グラン・カンが入りする時以外決して開かない。この大きな門の隣に二つ、それぞれの側の一つずつ小さながあり、他の人々は皆ここから入る。さらに一つの角の方にとても大きながあり、もう一つの角の方にももう一つあり、他の人々はここからも入る。

この城壁の内側にもう一つ城壁があり、これは横に広いよりもいくぶん縦に長い。この城壁の上にも前の城壁とすっかり同じように八つの楼がある。中にはやはり大君の武具が保管されている。これもやはり前の城壁とすっかり同じように南側の辺に門が五つある。他の辺はどれも門が一つだけあり、すでに述べた他の城壁もそうである。

これらの城壁の真ん中に大君の宮殿があるのだが、今からお話するように造られている。これはかつて見られた最大のものである。露台はないが、床は他の地面より十パームほど高い。天井はものすごく高い。広間と部屋の壁は全て金銀で覆われ、竜や獣や鳥や武将、その他様々な種類の動物の絵が描かれている。天井も同じようになっている。だから、金と絵以外何も見えない。広間はとても大きく広く、六千人以上の人間が充分そこで食事できる。たくさんの部屋があり、見るだに驚きである。とても大きくまたうまく造られているから、これよりもうまく設計したり造ったりできる能力を持った者はこの世に一人もいないだろう。上の屋根は全て紅・緑・青・黄とあらゆる色である。とても巧く丁寧に釉がかけられているから、水晶のようにきらめき、宮殿の周りのとても遠くまで光る。この屋根はとても強く丈夫に作られているから、何年ももつことをご承知ください。

今お話しした一つの城壁ともう一つの城壁の間に草地と綺麗な木々があり、その中にいくつもの種類の珍しい動物がいる。すなわち白い大鹿、麝香を作る獣、ノロジカ、鹿、リスそして何種類もの綺麗な動物である。城壁のあいだの土地は全て、人が通る道だけを除いてこうした綺麗な動物でいっぱいである。

北西の方向の一角に、とても大きな池があり、中にいくつもの種類の魚がいる。大君がそこにたくさんの種類の魚を入れさせたからである。大君は、この魚が欲しい時にはいつも好きなだけ手に入れる。いいですか、大きな川がそこに流れ込んで出て行くのですが、とても巧く造られているから魚は全く出ることができないのですよ。それは鉄と銅の網で造られている。

さらにお話すると、北の方角、宮殿から石弓一射程隔たつところに彼は、高さ百パス周囲一マイル以上ある盛り土すなわち山を作らせたのです。その山は、いつのときも葉を失わず常に緑の木がいっぱい、すっかり覆われている。いいですか、大君は、綺麗な樹があると言われるところへはどこでも、それを全ての根と多くの土ごと取らせ、象でもってこの山に持って来させるのですよ。どんな大きな樹でも、こうさせないものは「なかったでしょう」。このようにして彼はこの世で最も美しい樹をここに持ったのです。またいいですか、大君はこの山を深

い緑のアズルの岩ですっかり覆わせたのですよ。かくして、木々はどれも緑で山全体が緑なのです。緑のもの以外何も目に入らない。そのため緑山と呼ばれるのです。

山の上の頂の中央に、全て緑色の綺麗な大きい宮殿がある。いいですか、この山と樹と宮殿は眺めるととても美しく、これを目にする者は皆快さと喜びを感じるのですよ。それで大君は、この綺麗な景色を得るためと、それが彼に慰めと楽しみを与えるからこれを造らせたのです」

大都は、外城・皇城・宮城の三つの城壁が廻らされていたことが知られる。近代の復元図によると、①外城：周囲28.6km（1マイル1500m⁶として約19マイル）一辺平均約7.2km（約4.8マイル）、②皇城：周囲約11km（約7.3マイル）一辺平均2.75km（約1.8マイル）、③宮城：周囲約3.4km（約2.26マイル）一辺平均約0.85km（約0.56マイル）である⁷。が実際には、さらにその内にもう一つ④壁囲い（周屋）があり、そしてその奥に⑤宮殿が鎮座していた⁸。つまり、城壁は3重ではなくいわば4重であった。これが混乱を引き起こす。

Fの、最初の「一辺1マイル全周4マイル」の城壁は、後に続く記述からして、上の四つのうち③宮城の城壁に当たる。冒頭の「まず最初に方形の大城壁があり」というのは、この章は宮殿についてであり、その城壁ではという意味であろう。高さ11m、1パス150cmとすると約7.3パス、「10パス」は切のいい数字を取ったのでであろう。「白」は今の故宮と同じ漢白石、「胸壁」は女牆、「角の綺麗な楼」は角楼、各辺の中央の「楼」は後述される各辺の大門上の楼（門楼）のことで、角楼と合わせて全周「八つ」になる。筆者によれば、そこに一種類ずつ武具が保管されてあった。「南面の五つの門」とは、中央の大きいのが崇天門（幅58m 奥行き17m 高さ26m）、その両脇の小さい通用門（脇門）、その両側の大きいのは東の星拱門と西の雲從門に当る。他の各辺の「一つの門」は、東の東華門・西の西華門・北の厚戴門を言う。この最初の城壁を②皇城のそれとする見方があるが、門（各辺一つ）と楼（角楼なし）の数が合わないし、後の記述と矛盾する。それに皇城は、『元史』によれば完成は1295年のことで、マルコの当時どの程度にまで築かれていたかは分からない。

その内側の「もう一つの城壁」とは、したがってその内にある④壁囲い（周屋）のことになるが、実は一つではなく二つ、南の大明殿と北の延春閣のそれがあった。造りはほぼ全く同じで、確かにどちらも「横」東西より「縦」南北にいくぶん長く、城壁の上の「八つの楼」と「南面の五つの門」も、宮城と相似形である。その後の「他の辺はどれも門が一つ」は、北面には当て嵌まらない（大明殿2、延春閣0）が、それほど厳密さを求める必要はない。FGには、その「内側1マイル」とあるが、宮城の南面と宮殿の囲いの間は約100mである。

その真ん中にある「大君の宮殿」とはしたがって、それぞれの壁囲い（周屋）に囲まれた一番奥の二つの宮殿、⑤大明殿（幅60m 奥行き40m 高さ30m）と延春閣（大明殿より南北にいくぶん長くまた高い）⁹と周囲の建物群に当る。Fではle palaisと単数で、そのどちらかは分からない。床の高さ地面から「10パーム」は、1パーム（掌尺）25cmとすると2.5mになるが、両殿とも3層の台基の上に建てられており、地面からだとは十分それくらいの高さになったろう。会食「6千人」は、殿内のことであれば誇張である。同書で

は数値はたいてい大き目に取られている。内部では、天井が「ものすごく高い」ことに驚いている。広大な広間や部屋の金銀と豪華な障壁画は各地の宮殿の描写と変わらず様式的で、この筆者は芸術的な美の記述は得意ではなかったようである。各種の色に輝く釉の瓦の描写はこの宮殿だけのもので、目に強く焼きついたことは疑いない。ヴェネツィアの屋根瓦も美しかったが、赤茶色のテラコッタ素焼きで瑠璃瓦ではなかった。

次いで、「今話した一つの城壁ともう一つの城壁」の間に「草地と木々」があり、そこに様々な種類の動物がいっぱいいると言う。その二つの城壁というのが、上の④宮殿のそれ（周屋）と最初の③宮城のそれであれば、そうしたことはありえず、③宮城の城壁とその外の②皇城もしくは①外城のそれではなければならない。実際、宮城の城壁と皇城の城壁との間は、北側は御苑（現景山）西側は太液池があり、その空間には草木が生え動物園（霊園）があった。皇城の城壁は、攔馬牆とも称されることから分かります、それから内が皇の禁域であることを示す車馬止めの築地塀のようなもので、門は各辺に一つあったが角楼も門楼もなく高さもわずか3mで、宮城や外城の本格的な城壁とは違った。本書でも明確に言及されていないのは、まだ全体にわたっては築かれていなかったためであろう。「北西」の方向の一角にある、多数の魚のいるという「大きい池」とは、方角からすれば積水潭に当たるが、後の説明からすれば太液池のことである。「川」とは、西から来たってそこに流れ込み、流れ出て皇城の南面を伝って東の通惠河に合流する金水河のことか。

最後の、北の方角弩1射程のところにある、いつも緑の樹で覆われている盛り土の「高さ100パス周囲1マイルの山」とは上の太液池の中の瓊華島万寿山（万歳山）、その山上にある「宮殿」とは広寒殿のことである。島は高さ約45m周囲約880mで、切のいい数字とはいえ100パス（150m）1マイル（1500m）とはずいぶんかけ離れる。フビライが初めて造ったわけではなく、金朝がこの地に都燕京を築く際に沼沢地を開拓した土を積み上げて作ったもので、山上には離宮もあった。上の文は、それらを修復・再建したのが大君だったということであろう。「深い緑のアズル（ラピスラズリ）の石」で覆わせたかは確認されないが、美しい「樹」を移植させたことは、官庁に大木局のあったことに裏付けられる。フビライが樹を重視したことは、街道に並木を植えさせた功績が別に一章（Ch.101）を設けて取り上げられる。

以上、数値の誇張といくつか正確さを欠く点はあるが、基本的にはよく事実在即している。それどころか、門楼の各種の武具、宮殿の屋根の輝き、宮城外の草木と動物たち、池の魚と山の緑など、細やかな観察と描写もあった。これらを目撃せずして書くことは難しいであろう。目撃したのがマルコであれば、彼はそれを目にする機会をもち、とりわけ最奥の宮殿内部に足を踏み入れる立場にあったことを意味する。もしそうであれば、グラン・カンの側近との自称は有力な根拠を得る。例えば、著名な「元世祖出獵図」（台北故宮）で、フビライの周囲に馬に跨って描かれている従者たちは、色目人と思しき人物の方が多い。フビライにとって側近くに置くには、血縁と地縁の希薄な色目人の方がタルタル人（モンゴル人）やカタイ人よりかえって安全であったろうし、数少ないラテン人（ヨーロッパ人）としてポーロを重宝することもあったのではあるまいか。グラン・カンの身边は、想像以上に国際的だったとしてもおかしくはない。それでもしかし、目撃したのがマルコだった

という保証はない。他の誰かから伝え聞いたか書いた物をもっただけの可能性は常にある。それが誰だったかどのような書き物だったか、それ以上のことは分からない。ただその場合でも、伝聞したものを自分の言葉で語り直しあるいは書き物を筆録者ルスティケツロが理解できる言語に書き直さなければならない。それをしたのがマルコであったことを否定するのは難しい。この問題をさらに複雑にさせるのが、Rとの異なりである。そのテキストは次のようにある。

2) R (Ed. Milanese, pp.161~164)

「グラン・カンがふつう一年の三か月つまり十二月・一月・二月と、カタイオ地方の北東の端にあるカムバルという大都市に住まう。この新しい市の南よりに次のように彼の大宮殿が建っている。

まず最初に四角い城壁の囲いがあり、一面長さ八マイル、周りに深い堀があり、各面の真ん中に門が一つあって各地から集まってくる者たちは皆そこを通過して入る。次に周りに一マイルの空間があり、兵士がおり、その空間の次に一辺六マイルのもう一つの城壁の囲いがあり、その南面に三つの門、北面にさらに三つの門がある。そのうち真ん中のがより大きく、いつも閉じられていて、グラン・カンが出入りするときになければ決して開けられることはない。残りの二つはより小さく、一つは一方の側にもう一つはもう一方の側にあり、いつも開いていて人は皆そこから入る。この城壁のそれぞれの角と面の中央に綺麗な広い楼があり、したがって城壁をめぐって八つの楼があるわけで、その中にはグラン・カーネの軍需品がそれぞれ種類ずつ保管されている。たとえば、一つの建物には轡・鞍・鎧・その他馬具に属するもの、別の建物には弓・弦・箠・矢・その他騎射に関わるもの、また別の所には鎧・胸当て・煮しめた革の類い、といった具合である。

この壁囲いの内側にもう一つの城壁の囲いがあり、とても分厚くて高さ十パッサもあり、胸壁は全て白色である。城壁は方形で、周囲実に四マイル、つまり一辺一マイルで、この三番目の囲いには門が六つあり、二番目の囲いと同じように配置されている。そこにもとても大きな八つの楼があり、前述の二番目の囲いと同じように配されており、その中にやはりグラン・カンの武具が所蔵されている。城壁と城壁の間にはとても綺麗な樹々と草地があり、大鹿や麝香をつくる動物、ノロジカ・鹿その他そうした類の多くの様々な動物がおり、したがって城壁の間は空き地になっているところならどこでも動物がたむろしている。草地には草が豊富にある、というのも通り路は全て石が敷き詰められ、地面から二キュビットも高くなっており、その上は決してぬかるみとなることも雨水が溜まることもなく、雨水は草地を流れて土地を肥やし、草をたっぷりと生えさせるからである。

周囲四マイルのこの城壁の内にグラン・カンの宮殿があるが、それはかつて見られた最大の宮殿である。前述の城壁に北と南で接しており、中に広い空間があって、そこを家臣や兵士たちがそぞろ歩いている。宮殿には露台はないが、屋根つまり覆いはとても高い。土台となっている床は地面より十パルム高く、周囲に幅二パッサの床と同じ大理石造りの壁があり、その壁の内に宮殿が建てられており、したがって、宮殿の外の壁全体があたかも前庭のようで、そのまわりを歩いて回りながら外部を見渡すことができる。外壁の端にはとても綺麗な柱廊があり、

そこに人が入ることができる。広間や部屋の壁には金箔の竜・兵士・鳥、様々な種類の動物、戦の物語などが彫られている。天井も同様に造られているので、金箔と絵以外見えない。宮殿のそれぞれの角には大きな大理石の階段があり、地面から前述の宮殿を取り巻く大理石の壁の上に乗って歩いて、その階段を伝って宮殿に上る。広間はとても大きく広いので、ものすごく多くの人間がそこで会食することができる。宮殿の中にはたくさんの部屋があり、目にするに驚く。また宮殿はとてもうまく造られ整えられているので、それ以上にうまく造ることのできる者を見つけることはできないだろうと思われるほどである。上の屋根は赤・緑・アズロ・赤紫ほかあらゆる色である。窓にはとても巧みに薄く作られたガラスがあって、水晶のようにきらきら輝き、またその屋根はとても強く頑丈なので、何年ももつ。宮殿の後ろには大きな家や広間や部屋があり、その中には君主の私的な物すなわち金・銀・宝石・真珠・金銀の壺など彼の全財宝があり、またそこには彼の后や側室がおり、そこで彼は自分のことを嬉しく好みのままにさせ、その場所には他の者たちは入らない。

宮殿の囲いの反対側、グラン・カンの宮殿に向かい合って、グラン・カンのとすっきり同じような宮殿がもう一つ建てられており、グラン・カンの長男チンジスが住み、父の流儀、習わしならびにすべからくそのやり方にならって宮廷を営んでいる。これは、父の死後彼が統治することになっているからである。

またグラン・カンの宮殿から北の方角、弩一射程のところの城壁の囲いの内に人造の土の山があり、高さ優に百パッサ、周囲実に一マイル、とても綺麗な木がいっぱい植わっており、いかなる時節でも葉を落とさず、いつも緑色である。君主は、誰かがどこかに何か綺麗な木があると知らせると、それを根と土ごと掘らせ、どれほど大きく太かろうとも象に引かせてこの山に持ってこさせる。こうしてそこにはいつも緑のとても綺麗な樹々があり、そのため緑山と呼ばれる。頂上にはとても綺麗な宮殿があり、すべて緑色で、山・宮殿・樹々を眺めるととても美しく素晴らしいもので、したがって美しく心地よく楽しい眺めである。

またやはり市の北の方角に、うまく造られたとても広く深い掘り池があり、前述の山はその土で作られたものである。さほど大きくはない川がその掘り池を満たし、養魚池のようになっており、動物がそこへ水を飲みに行く。その川はさらにそこから流れ出し、前述の山の側の溝を通り、グラン・カンの宮殿と息子チンジスの宮殿の間の、とても大きく深いもう一つの池を満たす。その土はやはりかの山に積み上げられたのだった。これらの掘り池あるいは養魚池にはたくさんの種類の魚がおり、欲しい時にはグラン・カンはいくらかでも手にできる。また川はその掘り池のもう一方の端から発して流れ出るが、出口と入口には銅と鉄の網がいくつか張られて設計され造られているから、魚はどこからも出られない。さらに白鳥や他の水鳥もおり、宮殿から宮殿へはこの水の上にかけてられた橋を伝っていく」

かく、城壁から全く異なる。順に整理すると、まず最初に「一面8マイル」の城壁があり、1マイルの空間をおいて次に「一辺6マイル」の城壁、その次に「一辺1マイル」の城壁があって、そしてその内に「グラン・カンの宮殿」がある。それはさらに、周りの「大理石の壁」とその内の「宮殿」に分けられる。

このうち「一辺6マイル」の城壁は、Fでは次章で語られる①外城のことである。次の

「一辺1マイル」の城壁は、順番からすると②皇城の城壁に当るが、説明はFと同じ③宮城の城壁のそれである。そして「グラン・カンの宮殿」は、Fの④壁囲い（周屋）に当る「大理石の壁」とその奥にある⑤「宮殿」を合わせたものである。これらは後で見ることとして、では最初の「一面8マイル」の城壁とは何か。そうしたものは歴史上も図面上も存在しない。そこで、外城との間に「1マイルの空間」があり、周りに「深い堀」があるとされていることからして、新たに建設された大都の南にあった金朝の旧中都を誤ったのではないかとされる¹⁰。本書でも、簡単ながら次章で旧市として登場する。確かに、大都と中都は1マイルほど離れていたし、中都はすっかり深い堀がめぐらされていた。大都城の周りに濠が掘られるのは、ずっと後である。しかしながら、中都はそこから南に広がっているのもあって、その城壁が外城全体を取り囲んでいるわけではなかった。しかも、中都は大都よりも小さく、周囲約18.5km 一辺約4.6km（約3マイル）しかない。しかしそうした矛盾以前に、長く都に住み宮城の内部にまで通じていた者が、見ればすぐ分かるこれほど単純なことを誤るとは考えられない。つまり、誰かの書き加えである。「一辺8マイル」というのは、6マイルの外城の両端に1マイルの空間を置いただけであろう。が、どうした経緯でそうなったかは分からない。

次の「一辺6マイル」の①外城は、Rでも次章で再び記述される。しかしその門は、数は次章に合わせて南北各三つとしながら、その説明はこの章のF③宮城のそれである。その結果、楼は門楼四つと角楼四つの計八と、ちぐはぐなことになった。さらに、次の「三番目」の囲い「一辺1マイルの城壁」は、Fの最初のやはり一辺1マイルの③宮城の城壁に対応するが、門と楼については前の外城と同じ矛盾をきたし、全体として理解不能なものとなっている¹¹。②皇城の城壁は出てこない。その結果、草木があり動物がたむろするのは、Fでもあいまいだったが、Rでは宮城と外城の間になってしまった。これらは、次章の旧市中都と外城の記事をここに移して混ぜ合わせたがゆえの混乱である。これを書き換えた者は、大都が三重の城壁に囲まれていることを情報として知っていたに違いない。それを優先させたがため、中都の城壁と外城をここに移動させ、その内側の三つの城壁、皇城・宮城・宮殿のそれを一つにしてしまったと推測される。

最後の「グラン・カンの宮殿」は、さらに「大理石の壁」と「その奥の宮殿」自体に分けられており、Fの④宮殿の壁囲い（周屋）と⑤大君の宮殿に対応する。したがって大理石ではない。「前述の城壁と北と南で接している」というが、それが③宮城の城壁のことであれば、復元図に見る限りそうした事実はない。後方の延春閣の囲い壁は間に舞台を隔てるだけで宮城の北面とごく接近していたが、前方の大明殿と宮城の南面との間には広い空間があった。宮城内、とりわけ両殿閣の周屋内には他にも多くの建物が踵を接して連なっており、それを見誤ったのかもしれない。広間や部屋、天井の金箔と絵、屋根の記述はよく一致する。ただし、会食者F「6千人」はR「ものすごい数の人間」に、F「釉をかけられた」屋根はR「うまく薄く造られた玻璃」の窓に変っている。一方、外壁の周囲が回廊のようにになっていること、端に柱廊があってそこに入れること、角に大理石の階段がありそれを伝って宮殿に登ること等、Fにはない細部がある。注目すべきは、その「宮殿」の後ろには君主の私的な財宝を納める「大きい家」があり、そこにはまた彼の「后や側室」

がいると、建物がもう一つあったことを伝える文である。これはFにはなかった。名前こそ挙げられていないが、公的な政の場であった大明殿に対して、私的な生活の空間であった延春閣のことである。これからすると、FとRの⑤「宮殿」は大明殿のことになる。延春閣のことが後世誰かによって書き加えられることは難しく、ポーロのノートに遡ることは確実に考えられるが、ルスティケッロの祖本にあったのであればFで抜け落ちたか、なかったのであればZの編纂時にそのノートからラテン語に訳され、それがRに伝わったと考えられる。

この後Rは、長男チンジスが住むという「もう一つの宮殿」の記事がある。Fでは次章の冒頭に置かれており、その箇所で見える。次の瓊華島万歳山と緑の樹々はFとよく一致する。前述F「深い緑のアズルの岩」はない。一方、最後の池の記事は多くの異なりを見せる。ここでも注目すべきは、Fではun lacと一つだったのに対して、「池」は二つあることである。まず、「北」の方角に「堀り池」がある。方角からすると、積水潭に当たる。ところが、「前述の山」(万歳山)はその土で作られたという。積水潭に人造の山はなく、であれば太液池のことである。弩1射程という距離もそれにふさわしい。ところが、そこから流れ出た水は、その山の側の溝を通過して、グラン・カンの宮殿と息子チンジスの宮殿の間の「もう一つの池」を満たすという。位置からすれば、これが正確に太液池に相当する。二つの宮殿の間は、「水の上に掛けられた橋」を伝って行くと言う。復元図によると、瓊華島の南の儀天殿のある小島瀛州(現団城)は、両側に木の橋が掛けられて東の宮城と西の太子宮に結ばれていた¹²。とすると、最初の池は積水潭に当り、瓊華島の説明を誤ってそちらに当てはめたことになる。二つの池とは、太液池の北海と中海を指すことも考えられるが、上の小島と左右の橋によって分けられているだけの一帯の湖であって、溝で繋がれているわけではなかった。もっとも積水潭は、かつては太液池と繋がっていたが、後に切り離されて皇城の外を廻る通惠河となった。こうした事はしかし、今文献から分かることであって、当時どれだけ知られていたか、ましてや異国人であったらう筆者がどこまで通じていたか見極めるのは難しい。いずれにしても、ポーロのノートには積水潭のことについても何がしか記されてあったと見てよいであろう。

2. 街 (Ch.85)

3) F : Bibl. Nationale de France, Paris, Ms.fr.1116 (f.39va16-40ra25)¹³

Et encore uoç di que deiouste ceste palais en a fait faire le grant sire un autre palais senblable au sien, que ne i faille rien. & ce est fait por ce que le aie son filz, quant elle regnara & sera seingnor. & por ce est faït¹ tout en tel mainiere et ausi grant & con tantes murs cum est cel dou grant kaan, que ie uoç ai contes desoure. ² le fil cinchin³ que ie uos nomai desoure, que doit estre seingnor, & toutes celes maineres & celz costumes & celz fait que fait le grant kan, maintenoit & faisoit, por ce qu'el est esleu a sire tantost que le grant kan sera mort. il ha bien bolle & soel d'epire⁴; mes non pas sconpliemant⁵ come a le gran sire tant quant il uif. or or⁶ uoç ai contes & deuisseç des palais. or uoç conterai de la grant uile dou catai, la ou ceste palais sunt: porcoi fui faite

& comant.

il est uoir que iluec auoit une ansiene cite, grant & noble, que auoit a non garibalu⁷, que auaut⁸ a dire en nostre lengaie la cite dou seingnor⁹. & le grant kan treuuoit por seq astronomique que ceste cite se deuoit reuelere & faire gran contraire contre l'enpier. Et por ceste chaison le grant kaan fist faire ceste cite deiostre celle, que ne i a que un flum emi. & fist traire les iens de celle cite & metre en la uille que il auoit estoie¹⁰ qui est apelle taidu. elle est si grant com ie uoç conterai.

elle est enuiron xxiiii miles & est quares, que ne a plus de l'un quare que de l'autre.¹¹ est mures des murs de teres, que sunt grosses desout x pas & haut xx, mes uoç di qu'elle ne sunt pas si grosse desoure come desout, por ce que toute foies dou fundemant en sus uenoient mermant, si que desoure sunt grosses entor trios pas. elle sunt toutes merles & blanches. elle a xii portes & sor chascune porte a un grandisme palais & biaux, si que en chascu¹² quares des murs a trios portes & v palais, por qu'il hi a chascun cant encore un palais. et cesti palais ont mout grant sale, la o les armes de celz que gardent la cite demorent.

Et si uoç di que les rues de la uille sunt si droit & si large que l'en uoit de l'une part al'autra; & sunt ordree si que chascune porte se uoit con¹³ les autres. hi a mant biaux palais & mant biaux herberges & maintes belles maisonç. Elle¹⁴ eu mileu de la cite un grandisme palais, eu quel a une grant cloque, ce est canpane, que sone la noit que nulz ne aille por la uille depuis qu'ele aura sone trios fois, char¹⁵ puis que celle canpane a sone tantes foies com il ont ordree, ne oçe aler nulz por la cite, for que por beinçogne de feme qu'enfantent & por beinçogne des homes mal laides¹⁶. & celz que por ce uont conuient que il portent lumere. & uoç di qu'il est ordree que chascune porte soit gardee por miles homes; & ne entendes que il gardent por doutance qu'il aient de iens, mes le font por ennorance dou grant sire que laiens demore, & encore que il ne uelent que les lairons feissent domaines en la uille. [Benedetto: ¹ fait ² [Et hi demoroit Temur] ³ Cinghis ⁴ d'e[n]pier ⁵ si compliemant ⁶ Or ⁷ Canbaluc ⁸ vaut ⁹ seingnor ¹⁰ estoré ¹¹ [Et] ¹² chascu[n] ¹³ de ¹⁴ [a] ¹⁵ Car ¹⁶ malaides]

「さらにいいですか、この宮殿の近くに大君は自分のに似た何も足りないものもないもう一つの宮殿を建てさせたのです。そうしたのは、統治し君主となった時息子が持てるようにするためです。だから上にお話したグラン・カンのと全く同じように、大きくまた多くの城壁をもって造られた。そこには、前にその名を挙げたチンキン[の]子 [テムルが住んでおり] 彼は君主になるはずで、グラン・カンが死亡すると直ちに君主に選ばれるから、グラン・カンのやり方と慣わしと行いを維持し実行している。事実、彼は帝権の勅書と印璽をもっているが、大君が生きてある限り有しているほど完全にはではない。

宮殿については、これでお話しし記した。次に、この宮殿のあるカタイの大都市について、どうして造られたかどのようにしてかお話しよう。

そこには実は、カンバルクという名の大きく立派な古い市³があったのです。我々の言葉で君主の都という意味です。グラン・カン⁴は星占い師から、その市が反逆し、帝国に対して大逆をなすに違いないということを知った。そのためグラン・カアンは、その近くに間に川一つ隔ててこの都を造らせた。そしてかの市の住民を、タイドゥと呼ばれるこの建設した都市に移り住まわせたのです。それは、これからお話するごとくとても大きいものです。

周囲二十四マイルあり、四角形で一辺は他の辺より大きくない。土の城壁が巡らされ、厚さは下部で十パス、高さ二十パスある。といっても、上は下ほど分厚くはなく、基礎から上へと常に薄くなっているからで、上部は三パスほどの厚さである。すっかり胸壁があり、白い。門が十二あり、どの門の上にもとても大きく綺麗な楼がある。だから、城壁の各辺に門が三つと、どの角にも楼がもう一つあるから楼が五つあることになる。これら楼の中にはとても大きな広間があって、市を警護する者の武器が置いてある。

またいいですか、市の道路はとても真っ直ぐでかつ広いから、一方から他方が見通せるのですよ。また、どの門も他の門から見えるように設計されている。そこには綺麗な宮殿や綺麗な宿屋や美しい屋敷がいっぱいある。市の中央にもすごく大きい楼が[あり]、その中に大きな時鳴つまり鐘があって、夜に鳴り、それが三度鳴った後は誰も町を往来しない。つまりこの鐘が決まった回数鳴ると、出産する女性の用と病人の用以外は、誰も町に出ようとしない。また、その用で出歩く者は灯りを携えなければならない。またいいですか、どの門も千人の人間によって警護されるよう決められているのですよ。といっても、住民に対する恐れから護っていると考えないで戴きたい。そうではなく、その中に住む大君の名誉のためと、さらにはまた泥棒が町で悪事を働くことのないようにそうしているのです」

最初の、グラン・カンが「息子」のために近くに建てたもう一つの宮殿とは、太液池を隔てて宮城の西にあった皇太子宫隆福宮である。大明殿全体と相似形で、ほぼ同じ規模であった。そこの主を、ベネデットは「チンギスの子[テムル]」と校訂するが、写本では *le fil cinchin* <息子チンキン>である。チンキム(真金)の死(1285年)は2章前(Ch.83)に述べられているが、ここでは「彼は帝権の勅書と印璽を持っている」とあり、孫のテムルにそれが授けられるのは1293年のことであった。とすれば、主はまだチンキンであり、この文は同宮完成後(1274年)その死の前となる。Rでも「長男チンジス」である。Rのこの章の独自記事「アフマド事件」が起こったのは、この皇太子宫の前であった。

Rでは、前述のごとく、この記事は前章に置かれていた。Fでもこの後に、「宮殿についてはこれでお話した。次にこの宮殿のあるカタイの大都市について…述べよう」と、章の繋ぎの定型文が来ており、本来はここで前章が終わっていたと考えられる。現写本Fでは、章と章の境目は一行の空白と冒頭の大文字で示され、その空白に次章の見出しが別の手で書き込まれているのであるが、上のことは、章区分もまたそれら後の写字生によって行われており、必ずしもルスティケッロの祖本にまで遡る決定的なものではなかったことを示す。そのことはひいては、この辺りでのRの異なりも全く根拠のないものではなかったかもしれないことを意味する。

新都については、「カンバルク」という名の旧市があったが、グラン・カンは星占い師

からそれが「反逆」するに違いないと知ったから、「川一つ」隔てて「ダイドゥ」という新市を造り、そこに住民を移住させた、と説明される。とすると、カンバルクは金の中でダイドゥ(大都)が新都の名ということになるが、以後ダイドゥが用いられることはなく、常にカンバルクである。最初の区別は、ラシード等ペルシャ人の呼称に倣ったものであろう。旧市についてこれ以上のことはなく中都や金(王朝)の語は出てこないが、前章のRの記事からして、ポーロのノートにはもう少し詳しい情報は記されてあったと推定しているであろう。新都建設の理由、旧市民カタイ人の謀反についてはRに詳しく、そこで見ると「川」は、金水河から引かれて中都の外城を廻っていた外濠のことであろうが、実際は川一つということではなく、前章のとおり1マイルほどの空間があった。

大都是、「周囲24マイル、正四辺形、土の城壁、厚さ下部10パス高さ20パス上部3パス、白い胸壁、各辺3門計12門、門楼と角楼」となる。これが①外城のことで、近代の実測では周囲28.6km(1マイル1609mとすれば約17.8マイル)、東西より南北にいくぶん長い。城壁は版築の土城で、下部24m高さ16m上部8mの3:2:1の比になっていた。「下部10パス(15m)上部3パス(4.5m)」は、数値は珍しく実際より小さいが、比率はほぼ合っている。高さXX pas<20パス>(約30m)は何らかの誤記であろう(Rなし)。崩れてはいるが、現徳勝門外4kmに北辺の一部が残っており(元大都城垣遺址)、小丘のように連なるその大きさを歩いて確かめることができる¹⁴。外側には濠の跡も残っている。門は東西南各3門北2門で計11門、その上に門楼と角に角楼があった。近年(1274年)発掘された西辺中央の和義門(現西直門)の甕城(幅9.92m奥行き4.62m高さ22m)から、門本体の巨大さが想像される。また、外城東南角楼の基礎の一角が遺跡として残っている¹⁵。門が、対照性を破って11となっている理由については、設計者の劉秉忠が、三頭六臂両足の軍神哪吒太子の伝説に付会したためとの言い伝えがある¹⁶。それは与り知らぬ事であったろうが、北面も他と同じ3門と違って計12門としている単純な誤りがかえって、筆者が余所者つまり異国人だったことを語っている。大都の北3分の1は、次の明の都城ではその内側に城壁が築かれて城外とされてしまったように、草地のままで建物はなく住む者もいなかったと言われるほどであったことからして、そこまで確かめる機会はなかったであろう。

街については、一直線の広い道路、多数の綺麗な宿屋や屋敷、鐘楼と夜間外出のご法度、千人による門の警備を記す。都市計画に基づいてこれほど整然と碁盤目状に設計された巨大な都市はほかになく、誰しも印象付けられずにはいなかった。対面の門が見通せるというのも、今もそうであるとおりに決して誇張ではなく、この筆者も門楼に登ってその景観を何度となく楽しんだことであろう。皇城の外の坊ごとに区画された居民区は、寺院や官庁以外に一般人にも払い下げられ、富裕者層が豪華な屋敷や庭園を築いたことは次のRに詳しい。鐘楼は、明代に入って外城の北辺がずっと南寄りに築き直されたため今では北寄りになっているが、当初は正しく全体の中心に位置していた。建築は至元9年(1272年)、火事で消失し永楽18年(1420年)再建され、現在のはさらに後の乾隆12年(1747年)に竣工した。建て直されているが、同書に登場する北京の建築物では、盧溝橋(Ch.106)¹⁷と並んで当時の面影を伝える唯一のものである¹⁸。同じ年に鼓楼も並んで建てられているが、

言及されない。鐘楼に含まれているのであろう。門の厳重な警備にまつわって、「住民に対する恐れから護っていると考えないで戴きたい」とわざわざ断つてあるのは、最初の新都建設の理由にあった、カタイ人の反乱への危惧を踏まえたものである。

大都の街についてはFは以上で全てで、写本で1ページ余り（2蘭組み81行）、世界最大の都にしては、とりわけ後の詳細を極める杭州と比較して、簡略に過ぎる感は否めない。はたして、Rは個々の事項でさらに詳細でしかも別の記事がある。

4) R (Ed. Milanesi, pp.164~166)

「カムバル市はカタイオ地方にあるさる大河のほとりに位置し、かつてはとても立派で堂々としたものだった。このカムバルという名は、君主の都市という意味である。グラン・カン星占い師たちの意見により、この市が自分の支配に謀反を起こすに違いないことを見、近くの川向こうに別の市を建設させた。前述の宮殿はそこにあり、そこを流れる川の他はそれら二つを分け隔てるものは何もない。で、新たに建設された市はタイドゥと呼ばれ、グラン・カンは全てのカタイオ人つまりカタイオ地方出身だった者に旧市から出て新市にきて住むようにさせ、一方謀反する心配のない者たちは旧市に残した。新市には、とても大きかった旧市に住んでいた者たちを皆受け入れる余裕はなかったからである。それでも新市は、今お分かりいただけるような大きさだった。

この新市は周囲二十四マイル、正方形で、したがってその四角のどの一辺も他より大きくも長くもなくそれぞれ六マイルで、土の城壁で囲まれており、城壁は下部で約十パッサの分厚さがあるが、基礎から上に行くにしたがって薄くなり、かくて上部では三パッサ以上の厚さはなく、周りにずっと白い胸壁がある。市全体が真直で、大通りは一方から他方へ一直線に伸びているから、もし門の所の城壁に登って真直ぐ眺めると、向かい合うもう一方の側の門が見えるほどである。

そしてそれぞれの大通りの両側には至る所にありとあらゆる種類の家や店があり、市内で家屋が建っている敷地はすべて真四角でまっすぐに区切られており、どの敷地にも十分な中庭と菜園のついた広々とした大きな建物がある。こうしたこの敷地は各家の長に与えられている、つまり某家門の某はこの敷地を、別の家門の某はまた別の敷地を有するというふうに次々となっている。このように真四角なそれぞれの敷地の周囲には綺麗な通り路があり、こうして市全体が内がチェス盤のように四角に区切られており、とても美しく立派に整備されているので、それを述べるのはどんなにしても不可能なほどである。

市の城壁には十二の門がある、つまり各辺に三つで、それぞれの門と方形の角の上にはそれぞれとても綺麗な大きな楼がある。したがって城壁の各辺には五つの楼があることになり、そこには大きく広い部屋があってその中には市を警護する者たちの武器がある。それというのも各門は千人の人間によって守られているからである。といっても、何者かを恐れてそうしていると考えてはならず、ただ君主の名誉と偉大さのためである。それでも、星占い師たちの言により、カタイオ人に対してはある種の疑惑もたれている。

市の中心にはとある大きな高い楼の上に大きい鐘があり、夜鳴らす。これは、三つ目の鐘以後は、出産する女性か病人にとっての急用の時以外誰も町を出歩くことのないようにするためである。

また、正当な理由で外出する者は、明かりを持ち歩かなければならない。

また、市の各門の外にはとても大きな城外地区あるいは近郊地帯があり、各門の城外地区は両側で別の門の城外地区と接し、長さ三、四マイル続いており、したがって城外地区に住む者のほうが市内に住む者よりも多い。各城外地区あるいは近郊地帯には、市からほぼ一マイル離れたところに多くの綺麗な商館があり、各地からやってくる商人たちがそこに泊まる。各種の人々に一つの商館が割り当てられ、たとえば言えばロンバルディア人に一つ、ドイツ人に別の、フランス人にまた別の、といった具合である。また、新市と旧市の城外地区合わせて二万五千の娼妓があり、金で男たちに体を奉仕する。彼女たちには一人の総監督官があり、さらに百人毎、千人毎に監督官がいて、皆総監督官に報告する。これらの女性が監督官をもつ理由というのは、使節たちが君主の事柄や用事でグラン・カンの下にやって来、その費用で滞在する度に、その費用は彼らにとっても手厚く支払われるのだが、この監督官は毎晩これら使節とその一行のそれぞれに娼妓を一人提供する義務を負わされているからで、彼女らは毎晩交代し、代金は取らず、それが彼女らがグラン・カンに納める税だからである。

そのほか、警護兵たちが三十人か四十人で夜ずっと市内を馬に乗って回り、何者かが異常な時間に、つまり三つ目の鐘以後に市内を歩いていないか探し、調べる。誰かみつかりと捕らえられ、すぐ獄に入れられ、翌朝その役目に当たる役人がその者を取り調べ、何か過ちの罪があることが分かると、その程度に応じて棒打ちをいくつか食らわせ、それによって時に死ぬ者もいる。こうして人々はその罪が罰せられるが、彼らの間で血を流すことは好まず、彼らのバクシつまり物識りの星占い師たちが、人間の血を流すのは悪いことだと言うからである」

以下、Fとの異なりを主に検討する。冒頭、「カタイオ地方にあるさる大河のほとりに位置し」と始まる。金の中都は積水潭と太液池の源流に当る高粱河のほとりに位置していたが、大河と言えほどのものではなかった。一番近い比較的大きい川は、盧溝橋の架かる桑乾河（現永定河）で約6km隔たっている。したがって、これも大都をよく知る者の言ではありえない。ただし、この文はPからで、super magnum flumenとある。反乱の危惧のために、カタイ人は旧市から新市に移住させ謀反の心配のない者は残したと言うが、そうした施策が実際に採られたかは確認されない。周囲26マイルの城壁つまり外城は、前に見たとおりRでは前章にすでに出ていたが、ここでもFと同じくある。このことから、前章の記事が書き加えられたものであることが分かる。一方その後の町の建物については、Fは綺麗な宿屋や美しい屋敷がいっぱいあると言うだけで物足りなさは否めなかったが、Rには「どの敷地にも十分な中庭と菜園のついた広々とした大きな建物があって各家の長に与えられており、その周囲には綺麗な通路があって市全体がチェス盤のように四角に区切られている」（要約）と詳しい。北京の原型は大都に遡ると言われるとおり、この文は今も残る坊と胡同と四合院の起源を伝えるものである。Fのあまりの簡略さから判断して、ルスティケッロの祖本にはあったのが、後に抜け落ちたと見てよい。最後の、門の警備にまつわって、「それでも星占い師たちの言によりカタイオ人に対してはある種の疑惑がもたれている」と念押ししているのは、次章のアフマド事件への伏線である。

その後Rには、上のごとく城外地区とそこにいる娼妓たちと市の警護についての長い

記事がある。Fでは、市の警護を除いて10章後の第96章にあり、そこで検討する。Rでもその章(RIII7)で簡単なが繰り返されている。他版では、FG・TA・VAはFと、PはRと共通する(Zはこの章を欠く)。記事の重複がある場合、常識的にはどちらかがコピーか移動であり、Fは第96章にしかないことからすると、その章が元の場所だったと考えられる。ただし、内容的にはこの章のRの方がずっと詳しい。Rはこの後に名高いアフマド事件の長い一章(RII8)をもつが、紙数の関係で事件の核心部分だけを訳す。

3. アフマド事件

5) R (Ed. Milanesi, pp.166~169)

〔前略〕こうしてこの男は、二十二年の間この権力をふるっていた。が、とうとう土地の者たちつまりカタイ人たちは、彼が自分たちの妻や彼ら自身に対して途方もなく犯していた数限りない不正と極悪非道の行いを見て、もはやいかにしても耐え忍ぶことがならず、彼を抹殺して市の政府に反旗を翻すことを決心した。その中にとりわけチェンクという名のカタイ人がおり、彼は配下に千人を擁していたが、かのアクマックは彼の母親・娘・妻に乱暴を働いていた。そのことで怒りに満ちていた彼は、一万人の長であるヴァンクというもう一人のカタイ人と、かの男を破滅させることを語らった。その結果、グラン・カンが三か月カムバルゥにあり、次いで出立してシャンドゥ市に行き、そこにやはり三か月留まり、同じく息子のチンジスも出発していつもの所に行ってしまう、一方かのアクマックが市の管理と警備のために残るその時、それを実行しようということになった。何か事が起こると彼はシャンドゥのグラン・カンの所に使者を遣り、カンは自分の意志を答えてよこすのである。このヴァンクとチェンクは相談し合っとう決め、それをその土地の主だったカタイ人に伝えようとし、皆の同意のもとに他の多くの都市と友人に知らせた。すなわち、これこれの日にしかじかのことを実行することに決定したので、狼火の合図を見たらすぐ髭を蓄えている者を皆殺し、また同じようにするよう他の市に狼火で合図すること、である。髭を生やしている者は殺すべしというのは、カタイ人は生来髭がなく、タルタル人とサラセン人とキリスト教徒はたくわえているからである。また、カタイ人は皆グラン・カンの支配を憎んでいたということをご存じありたい、というのも彼は彼らの上にタルタル人、たいていはサラセン人の支配者をおいており、彼らは自分たちが奴隷のように思えてそれに我慢がならなかったからである。さらにはグラン・カンは法的にはカタイオ地方の支配権を有さず、むしろ力づくで獲得したもので、彼らを信用せず、その領土を、自分の一門に属し自分に忠実でカタイオ地方出身ではないタルタル人・サラセン人・キリスト教徒に与えて治めさせていたからである。

さて、上述のヴァンクとチェンクは、決行の時が来ると夜半宮殿に入り、ヴァンクが椅子に座り、自分の前に沢山の明かりを灯させ、旧市に住んでいた代官のアクマックのところを使いを遣り、グラン・カンの息子チンジスからと言って、今し方夜着いたばかりなのですぐ伺候すべしと伝えた。これを聞いてアクマックは大いに怪訝に思いながらも、彼をととても恐れていたから直ちに出向いたが、市の門を入ったとき、コガタイというタルタル人に会った。彼は一万二千人の指揮者で、彼らとともにずっと市の警備に当たっていたのだが、彼に言った、「こんなに遅くどこに参られる」。「チンジス様の所に、今し方おいでになった」。コガタイは、「私

が気がつかないほどお忍びでおいでになったなどということが一体あり得るだろうか」と言いながらも、供の者の一団とともに彼に付いて行った。一方かのカタイ人たちは、「アクマックさえ殺害することができれば、他に恐れるものは誰もいない」と言っていた。さてアクマックは、宮殿に入るとすぐたぐさんの明かりが灯されているのを見、チンジスと思ひこんでヴァンクの前にひざまずいた。と、そこに待ちかまえていたチェンクが、刀で彼の頭をはねた。それを見て、宮殿の入り口に留まっていたコガタイは「謀反だ」と叫び、直ちに椅子に座っていたヴァンクに矢を射て殺し、兵を呼んでチェンクを捕らえ、もし家の外にいる者があればその場で処刑されると町にお触れを出した。カタイ人たちは、タルタル人がことを発見したのを見、またかの二人のうち一人は死にもう一人は捕らえられて首謀者がいなくなったのを見て、家に留まり、反乱する手はずを整えていた他の町に何の合図を送ることもできなかった。(中略)とまれ、この事が起こった時、マルコ殿は当地にあったのだった」

パイロ(代官)の職にあったアクマック Achmac のあまりの専横に、千人長チェンク Cenchu が万人長ヴァンク Vanchu と語らって、グラン・カンと息子チンジス(チンキム)の留守時を狙い、他都市のカタイ人ともども一斉に決起する手はずを整え、その日の夜半ヴァンクがチンジスになりすまして宮殿に座り、今帰ったからすぐに伺候すべしとアクマックを呼び出し、やってきて前に跪いた彼の首を刎ねたが、不審に思って同行してきたタルタル人の警備隊長コガタイ Cogatai に気付かれ、ヴァンクは射殺されチェンクは捕えられて、叛乱はならなかった、というのが本書の梗概である。

『元史』では、至元19年3月17日(1282年4月10日)中書省平章政事の職にあったイスラム教徒阿合馬 Ahmad が暗殺された事件で、首謀者は千戸長王著と妖僧高和尚、謀殺は皇太子宮の中ではなく前、刀で首を刎ねたのではなく銅鎚で脳を砕いた。謀反に気付いて人を呼んだのは尚書張九思、撃ち殺したのは留守司ダルクチ博敦(ボドン)であった¹⁹。ムールとペリオによれば、チェンクは千戸 ch'ien-hu の音写で王著のこと、ヴァンクは万戸 wang-hu の音写で人物は不明²⁰。愛宕は、ヴァンクは王著の、チェンクはその職名千戸の音写で、これを二人の人物と誤ったものと見る²¹。

『集史』では、首謀者はアフマドと同じ位の高官「カウ・フィンチャン」Kau Finchan。彼は「さるカタイ人僧」にアフマドの殺害を相談し、大都城外の「チャムチャル」という溪谷と沿道に多数の兵を配置し、チンキムが帰ってくるとの噂を流してアフマドに出迎えさせる手はずを整え。その日の夜、女性用の輿に乗ったカウ・フィンチャンと一党がランタンと松明を灯して宮殿に近づくと、チンキムを恐れていたアフマドはまかり出て歓迎の杯を差し出し、その時一党は彼を打ち倒し、殺害した。少し離れた所で見守っていた彼の護衛の「アミール・トゥルカン」Amir Turkan は、矢で輿の中のカウ・フィンチャンを射て殺した。「カウ・フィンチャン」とは、ムールとペリオによれば、Kau は高、Finchan は平章 p'ing-chang の音写であるが、高和尚 Kao Ho-shang と混同したもの。1270年から1275年まで平章 p'ing-chang としてアフマドの同僚だった張易 Chang I のことで、『元史』では、「枢密副使」だった彼も手勢を提供し、事件後共謀者として処刑されている²²。

これら本書と元史と集史の三つのヴァージョンのうちどれが事実にもっと近いかの検証は筆者の手に余るが、この記事そのものが、たとえ現場でなくとも確かに「当時その地」にあった者によって持ち帰られ伝えられたことを疑うのは難しいであろう。ただ、それがポーロであった保証はなく、この程度の情報はその環境にあった者なら手に入れるのはさほど困難ではないであろうが、では彼でなかったとすればそれが本書に取り込まれた経緯を跡付けるのが難しい。逆に、どのような形であれマルコによって持ち帰られルスティケッコに伝えられてその祖本に記されてあったのであれば、今度はこれほど興味をそそる記事が後にFで丸ごと省略された納得行く理由を見付けるのが難しい。これらを何とか矛盾なく説明しようとすれば、ポーロのノートにはあったが何らかの理由でルスティケッコに採られなかったのが、誰かがそのノートを基にFの祖本に書き加え、それがラテン語に訳されてZの祖本となり、Z¹（ギジ稿本）を通じてラムージョによってRに訳されたと考える他ないのではなからうか。すなわち、材料はマルコのノートから採られたのであれ、この記事を書いたのはルスティケッコではなく別の誰かである。ただし、Fの祖本に書き加えた者とそれをラテン語に訳した者が同一人物かそれとも別人かは分からない。Zの祖本が出来たのがFの祖本が作られた時に近ければ、つまりさほど時を置かずに書き加えられ訳されたのであれば同一人物の、ずっと後に訳されたのであれば別人の可能性が高くなる。現写本Zは15世紀後半（1470年頃）のものとしてされる。

最後の、「とまれ、この事が起こった時マルコ殿は当地にあった」の文は、原典つまりルスティケッコの祖本にはなかったが、確かにマルコのノートにはありそれから新たに加えたものであることを筆者が念押ししているのではないか。またこの記事は、上の「カタイ人は皆グラン・カンの支配を憎んでいたということをご存じありたい…。グラン・カンは法的にはカタリオ地方の支配権を有さず、むしろ力づくで獲得したもので…タルタル人・サラセン人・キリスト教徒に与えて治めさせていた」といった文に見られるごとく、グラン・カン・フビライに対して批判的な口調の強くまた明白なことが指摘され、これまでの大君に対する絶大な賛美とは相容れず、そのことはこの記事の筆者が他の部分の筆者すなわちルスティケッコとは別人であるとする推定に、一つの有力な根拠を与える。Rの流麗な文章は、編訳者ラムージョによってドラマチックに書き直されたものであることは言うまでもないが、記事そのものは彼のものではありえない。

4. 城外 (Ch.95) ²³

6) F : Bibl. Nationale de France, Paris, Ms.fr.1116 (f.44vb33-45va21)

Et quant il est uenus a sa mestre uile de cambalu¹, il demore en son maistre palais iiii iors & ne plus. il tient gran cort & riche tables. il fait grant ioie & grant feste avech seq femes, cara ie uoç di qu'il est meruoilose chouse ancoir la gran solenpnite, que le gran sire fait cest iiii iors.

Et si uoç di que en ceste cite a si grant moutitude de maisonz & de ienz, entre dedenc la uille & dehors, que sachies qu'il hi a tant burs come portes, ce sunt doçe, que sunt grandismes, que ne est homes que peust contre² le noble³. Car assez plus iens⁴ en

celle burs que en la uille. Et en cesti burs demorent & herberient les mercaant & tous autres homes que hi uient por lor beçoigne: que hi uient en grandisme abundance, entre por le seingnor⁵ & por ce que la uille est ensi boine marche que les mercaans e les autres homes hi uient por lor beçoigne. & si uoç di que es les⁶ burs a ausi belles maisonz & ausi biaux palais come en la ville, hors celz dou grant sire. Et sachies que en la uille ne sesoillent⁷ nulz homes que se more. mes se el est ydres si se porte au leu ou doit estre ars le cors, qui est dehors tous les burs. Et ausi auint des autre mors que sesoillent⁸ encore dehors tous les buerç⁹.

Et encore uoç di un autre chouse: que dedenz la uille ne ossent¹⁰ demorer nulle feme pecherise, ce sunt femes dou monde que funt s'uis¹¹ a les homes por monoi. mes uoç di qu' eles demorent es burs. & sachies q'il hi n'i a si grant moutitude que nulls homes le poust croire, car ie uoç di qu'ele sunt bien xx^m, que toutes s'uent¹² les homes popr monoi. & si uoç di que toute hi sunt beinçoignes por la grandisme quantites des mercaant & des foreister, que hi uient & alent tout iorz. adonc poes ueoir se il ha grant habundance de iens en canbalu, puis que les femes mondanes hi sunt tantes com ie hai¹³ contes.

Et sachies tuit uoiremant que en ceste uille de canbalu uient plus chieres chouses & de greingnor¹⁴ uaillance que en nule cite dou monde. Et uoç dirai quelz tout auant. ¹⁵ uoç ¹⁶ que toutes les chieres chouses que uient de ydie¹⁷, ce sunt pieres presieuses & perles & toutes autres chieres chouses, sunt aportes a cestes uilles. Et encore toutes les belles chouses & toutes les chieres que sunt en le prouence dou catay & de toute autres prouences, hi sunt aportes ausint. Et ce auint por le seingnores qui hi demore, & por les dames, & por les baronz, & por les grant habundance de la moutitude de les iens des le hostes, & d'autres iens que hi uient por achaison de la cort que le grant sire hi tient. Et por ce que ie uoç ai contes, a ceste uille uient plus chieres chouses & de greingnor uaillance & les greingnor quantites que en nulle uille dou monde, & pul¹⁸ merchandise hi si uendent & achatent. Car sachies de uoir que chascun ior hi entre en ceste uille plus de m charete chargies de soie. car il i se laborent maint dras d'ors & de soie. Eet encore ceste cite ae¹⁹ enuiron soi plus des ii^c & loingn & pres, les quelz uient les iens de cestes uilles a achatre maintes chouses a ceste cite, & d'eluec hont les chouses que a lor sunt beinçoignables. & por ce ne est grant chouse se en ceste cite de canbalu uient tantes chouses com ie uoç ai dit. [Benedetto: ¹ Cambalu[c] (以下同) ² conter ³ no[n]bre ⁴ [sunt] ⁵ seingnor (以下同) ⁶ eles ⁷⁻⁸ sevoillent ⁹ burs ¹⁰ osent ¹¹ servis ¹² seruent ¹³ ai ¹⁴ greingnor (以下同) ¹⁵ [Car je] ¹⁶ [di] ¹⁷ Y[n]die ¹⁸ p[l]us ¹⁹ a]

「首都カンバル[ク]に来ると、彼は主宮殿に三日滞在するが、それ以上ではない。大宴会と豪華な饗宴を催す。夫人たちとともに大いに楽しみ、祝う。いいですか、大君がこの三日間に行う盛大な祝宴は、見て驚くべきものなのですよ。

いいですか、この都は市内も市外も——門と同じ数つまり十二の広大な城外があることをご承知下さい——ものすごい数の家と人があり、誰もその数を数えることはできない。城外には市内よりはるかにたくさんの人が[いる]からです。これら城外には商人、その他所用でやって来る者たちが皆住んだり宿泊したりしている。彼らはここに大量にやってくるが、それは君主のためと、市がとてよ市場になっているため、商人や他の者たちがその用でやって来るのです。いいですか、これら城外にも、大君の以外にも市内と同じように綺麗な家や美しい宮殿があるのですよ。また、人が死亡しても市内には決して埋葬しないことをご存じください。それが偶像崇拝者なら、城外全体の外にある遺骸を焼く所に運ばれる。他の死者の場合も同じで、やはり城外全体の外に埋葬する。

もう一つお話しすると、罪深い女たち、すなわち金のために男に奉仕する浮世の女は、決して市内に住むことはしないのですよ。彼女らは城外に住むのですよ。そこにはものすごくいて、誰も信じられないほどであることを知ってください。なぜならいいですか、二万人もおり、皆金のために男に奉仕するのですから。さらにいいですか、毎日ここに往き来するものすごい数の商人と他国人のために、ここでは皆必要なのです。で、浮世の女たちが今お話したほどたくさんいることからしても、カンバルクにはどれほど多くの人間がいるかお分かりでしょう。

また、このカンバル[ク]の市には世界のどの都市よりも高価なもの、価値高いものがやって来ることをよくご存じください。何よりも次のことを言いましょ。[すなわち]いいですか、イ[ン]ディエから来る高価なものは全て——つまり貴石・真珠その他高価なもの全て——この市に持ち来たられるのですよ。また、カタイ地方や他のあらゆる地方にある綺麗なものや高価なものは全て、やはりここに持って来られる。それが起るのは、ここに住む君主、夫人、家臣、それにもものすごい数の住民、軍、その他大君がここで営む宮廷の用でここにやって来る人々のためです。今お話したことのために、この市には世界のどの町よりも高価な物や価値高い物がより大量にやって来、より多くの商品がここで売買されるのです。つまり、この市には毎日絹を積んだ車が千台以上入って来ることを本当にご存じください。ここでは金と絹の錦がいっぱい織られるからです。またこの市の周囲には二百以上の[町]があり、遠近問わずその町から人々がたくさんものを買いにこの市にやって来、ここで必要なものを手に入れるのです。だから、このカンバル[ク]市に今お話したほどたくさんものがやって来るとしても、大変なことではないのです」

最初の、大君はカンバルクに3日間留まって盛大な祝宴を催すとの文は、前の大都の章のあと饗宴(Ch.86)・祭礼(87-89)・家臣(90)の章とその後長い狩猟の数章(Ch.91-94)があり、それから都に戻ってきた時のことを言うものである。いわば季節移動に伴ってのグラン・カンの記事は一応そこで終り、ここからは残る側面、経済・政治・社会それに少ないながらも市民の生活や事物へと移る。したがって、ここで再び登場する大都で記されるのは、城内ではなく城外、すなわち外城の外の世界とそこに生きる人々のことである。何重にも廻らされた壁の内なるこれまでの宮廷の世界と、その外なる庶民の世界との落差は大きい。

筆者は、その間を繋ぐかの12の門の外には広大な近郊が広がること、そしてそこに住ま

う人々は無数であることを対置する。しかも彼らは、城内の君主や宮廷人そして市場の用のためにあった。城内では禁じられ城外で行われることは二つある。一つは死者の埋葬で、城外全体のさらに外に埋葬するという。火葬の風習はヨーロッパ人には珍しく、これからも各地の民俗を区別する一つの指標として使われる。もう一つは le feme pecherise <罪深い女たち>である。「金のために男に奉仕する浮世の女たち *femes dou monde*」は決して市内に住むことはない。この言葉遣いにも、性に対するマルコとルスティケッロの慎みが見て取れよう。ただし、その数は多い。「2万人」で、この市に往来する商人と他国人のためだという。都の人口は、無数だというばかりで大体の数もないが、その数を人の多さの証に使っているのはいささか不謹慎であった。当時の首都圏の人口は、戸籍に記載されている一般人だけでも約40万、宮廷・官吏・軍人等を入れると100万近かったとされる。確実に世界最大の都市であった。

しかし、今もそうであるが、大都是生産都市ではなく「世界最大の」消費都市であった。宝石・真珠など高価なものが、インドをはじめ内外から全てここにやってくる。その最たるものが絹で、周囲にある200以上の町から「毎日絹を積んだ車が千以上入ってくる」との名高い文がある。そしてそれも城内、つまり君主・家臣・武将らとその家族と宮廷の用のためであった。

7) R (Ed. Milanese, pp.181~182)

「市に戻ってくるとグラン・カンが、豪華な大宴会を三日にわたって催し、一緒にいた家臣皆ともども大いに楽しく祝う。その三日間に彼が行う盛大さは目にも素晴らしいものである。

市内および市外には（十二の門と同じ数のとても大きな城外地区があるため）、ものすごい数の人々と家屋があり、市内より城外の方が人が多いから、誰にもその数は分からない。これら城外には商人、それに君主の住まいがあるためその用でそこに赴く人々が滞在したり泊まったりし、その数は多い。つまり彼が宮廷を営むところはどこでも、各地から様々な理由で人がやってくる。城外には、グラン・カンの宮殿以外にも市内と同じように美しい屋敷や宮殿がある。死者は誰であれ市内には埋葬されず、偶像崇拝者であれば焼く場所に持ち運ばれ、それは全ての城外地区の外にある。また同様に市内ではいかなる凶ごとも行われず、城外地区の外だけである。娼妓も（隠れたのは別として）、別の箇所述べたごとく¹、市内にすることはなく皆城外に住み、その数は二万五千を越え、金で男たちに奉仕する。それでも、絶えず宮廷に往来する多数の商人や他国人のために皆必要なのである。

またこの市には、全世界にある最も高価で価値高いものが持ち来られるが、とりわけインドからは宝石や真珠、それにあらゆる香辛料がもたらされる。さらに、カタイオ地方および他の全ての地方にあるあらゆる価値高いものがもたらされるが、これは、宮廷のためにここにずっと滞在している人々の数の多さゆえである。ここでは他のどの都市でより多くの商品が売られ、毎日絹の荷車と積荷合わせて千以上が入ってくるし、また金と絹の布が大量に織られる。市の周囲には無数の城市や他の町があり、その人々は宮廷がそこにあるとき、市に必要なものを売ったり自分たちに必要とするものを買ったりして大部分暮らしている」

対校から分かるとおり、この章の R は F と基本的によく一致し、娼妓のことを除いて事実に関わる異なりはない。全体としてむしろ F の要約との印象を受ける。ところが城外地区と娼妓の記事は、「別の箇所ですべたごとく」とあるとおり、前の大都の章 (Ch.85) の最後にもあった。そこでの R は、ここの F よりずっと詳しくまた町の警備に関する独自記事を有していた。

ここでは城外地区について、互いに接し 3、4 マイル続くこと、市から約 1 マイルのところ商館があって各地からの商人に割り当てられること。娼妓については、一人の総監督官と百人毎千人毎の監督官がいて、君主の用でやって来る使節たちに毎晩一人提供する義務を負わされていること、彼女らにとってはそれがグラン・カンに納める税であること。市の警備については、3、40 人が一団となって夜中馬で見廻り、三つ目の鐘以後に市内を歩いている者があれば捕えて取り調べ、罪があると棒撃ちの罰を食らわすこと、があった。これらはこの章の F にも R にもない。

この部分についても、F の省略か Z (R) の書き加えかのいつもながらの問題が生じる。が、別の章にあること、この章には F・R ともにあること、またこの章 (Ch.95) の F の記事はそれ (Ch.85 の R) の要約ではありえないことからして、F の省略でも要約でもなく、ポーロのノートからあるいは他の資料からでも、F とは別の機会に Z (R) に書き加えられたと考えるほうが自然であろう。なお、商館が各種の人々に割り当てられるところで、R (Ch.85) に「たとえて言えばロンバルディア人一つ、ドイツ人に別の、フランス人にまた別の、といった具合である」とあり、これが大都にヨーロッパ各国の商人がいた根拠として持ち出されることがあるが、「たとえて言えば」であって、この「各種の人々」というのが外国人を指すかどうかは定かでない。

5. おわりに

はじめにも述べたが、フビライの宮殿と大都の街を記すこれらの章は、本書の核心をなす部の一部であるとともに、豊富な資料と今に残る遺構・遺物によってその記述の当否と精粗を検証する恰好の部分でもあった。そのことは、その筆者はいったい誰なのか、本当にマルコ・ポーロなのかという疑問と、F と Z・R という二つの系列のテキストの間の大きな異なりはいったいどのようにして生じてきたのか、どう捉えるべきかという、根源的なそして最大の問題に結びつく。これらの章には、それら二つの問題がきわめて明白な形で顕在していた。

宮殿の描写は、一般人には禁じられていた皇城の欄馬牆を乗り越え宮城の内に入り、大明殿のさらに後ろにあるフビライの後と側室が暮らすというもう一つの建物、延春閣にまで及んでいた。息子チンジスの宮殿との間には池が二つあり、その出入口には魚が逃げないよう金網が張られていることまでであった。城外地区にいる多数の娼妓たちは誰の目にも明らかだったとしても、監督官がいてグラン・カンの下にやって来る使節たちに無償で毎夜一人提供する、それが事実であれ誇張であれ、義務を負わされていること、そしてそれが彼女たちの貢納であることを教えるのは、誰の筆にも出来るわけではない。アフマド事件の詳細は『元史』にも『集史』にも劣るものではなく、しかも最も早いニュース速報で

あった。これらの記事を、その筆者の身分と立場から切り離して考えることは難しい。

ところがそれらは、Rにしかなかった。Fには、宮殿（大明殿）はあるがもう一つの建物はなく、池はあるが一つであり、城外に娼妓たちはいても監督官の姿はなく、アフマド事件のニュースが伝えられることはなかった。しかもそれらは、事実在即していた。ところが一方では、Rには、外城の外にはさらに一辺8マイルの城壁があって都を取り囲み、外城と宮城には六つの門と八つの楼があり、二つの池は溝で繋がり、カンバルクは大河のほとりにあった。これらは事実在即さない。またアフマド事件のフビライは、それまでのように我々が始父アダムよりこの方この世の最大の偉大な帝王ではなく、カタイの支配を不当に奪ったタルタル人君主であった。

それぞれの箇所ですべてゆえ繰り返すことはしないが、これら筆者とテキストに関わる根本的な問題を矛盾なく説明できる答えはまだ見付かっていない。

註

1. (1)「サイトン泉州」本誌23-2, 2010, pp.133-52; (2⁻¹)「マルコ・ポーロ写本(1)」同23-3, 2010, pp.131-51; (2⁻²)「マルコ・ポーロ写本(2)」同24-1, 2010, pp.131-51.
2. 図・データ等全て、一々その箇所ですべて注記しないが、朱楔『元大都宮殿圖考』北京古籍出版社1990(1936); 陳高華『元の大都—マルコ・ポーロ時代の北京』佐竹靖彦訳 中央公論社1984; 杉山正明『世界史を変貌させたモンゴル』角川書店2000、に拠った。
3. F: MS: Bibliothèque Nationale de France, Paris, Ms.fr.1116 [F]; *Marco Polo Il Milione*, prima edizione integrale a cura di Luigi Foscolo Benedetto, Firenze Leo S. Olschki 1928 [Benedetto].
R: Giovanni Battista Ramusio, I viaggi di messer Marco Polo, gentiluomo veneziano, *Navigazioni e Viaggi*, a cura di Marica Milanese, Torino Einaudi 1980, vol. 3 pp.75-120 [R].
4. (f.38va24-39va14) は、第38葉裏 a 欄 (第1欄) 24行から39葉裏 a 欄14行までを示す: Foto ①。写本には段落はないが、通読上の便宜のため改行を施した。
5. [] 内は上掲ベネデットの校訂。
6. 同書では長さの単位にパス (約1.5m) とマイルが使われているが、もちろん実測された厳密なものではないため、ここでは1マイル1609mではなく1500mの概数を当てる。
7. 以上のデータは陳高華前掲書からであるが、朱楔『元大都宮殿圖』では宮城周囲6里30歩、1里550m 1歩1.5m とすると3.75km (約2.5マイル)。宮城壁、東西460歩 (690m) 南北615歩 (922.5m)、計3.225km (約2.15マイル)。
8. 朱楔『元大都宮殿圖』Foto ②。
9. 同『元宮城圖』では、周廡大明殿120間、延春閣172間。1間1.82m とすると、大明殿218.4m、延春閣313m。
10. 愛宕松男訳註『東方見聞録』平凡社東洋文庫 1978, (1) p.205注3.
11. ルスティケッロによって編まれたオリジナルには全てが揃っていたとするベネデットはこのRの文を採らざるを得ず、しかし事実ともFとも食い違うため、自分のイタリア語集訳では、一辺6マイルの城壁のところを括弧に入れて筆者に次のように言わせている: 「これが市の真正の城壁で、それについては先で述べる。グラン・カンの宮殿はこの2番目の壁の内にあるのだが、そこに達するにはさらに二つの囲いを通り抜けなければならない」。加筆は20世紀に入っても行われていたわけである: *Il Libro di Messer Marco Polo Cittadino di Venezia detto Milione dove si raccontano le Meraviglie del Mondo*, tr. da Luigi Foscolo Benedetto, Milano-Roma, Treves-Treccani-Tumminelli 1932, p.119.
12. 現団城中央の小さなガラス張りの亭には、フビライが至元2年 (1265年) に作らせ瓊華島広寒殿に飾らせていたという濃い青白玉製の巨大な酒甕「瀆山大酒海」(直径1.5m 重さ3.5kg 容積2千lt) が置かれている: Foto ③。次章の「饗宴」(Ch.86) の場面にも巨大な酒器 (そこでは

純金製)が登場する：Cf. 春名徹『北京一年の記憶』岩波新書2008、pp.140-42.

13. Foto ①.

14. Foto ④.

15. Foto ⑤

16. ポッカッチョ『デカメロン』第6日第10話「チポツラ修道士の話」の舞台、「カットイオ」Cattaioの国の高貴の身の老人が住む豪華極まりない宮殿は、このグラン・カンの都城を下敷きにしたものであることが知られるが、その特徴は門の多いことで32ある。その人物の名は「ナタン」Natanで、西方では旧約聖書に登場するダビデの子にして予言者ナタンからとされるが、太子哪吒Na-ta/Na-zhaとの似かよりは偶然にしてはできすぎている：cf. 拙稿「ジパングの系譜（3）-ポッカッチョ『デカメロン』の東方」『大阪国際女子大学紀要』vol.23-1, 1997, pp.19-43.

17. Ch.106『盧溝橋』のテキストは、上掲拙稿「マルコ・ポーロ写本（2）」pp.95-100.

18. Foto ⑥.

19. 『元史』巻205、列伝92「姦臣」至元19年3月の条。

20-22. A.C.Moule, The Siege of Saianfu and the murder of Achmach Bailo, *Journal of the North China Branch of the Royal Asiatic Society*, 1927, pp. 1-28; Paul Pelliot, *Notes on Marco Polo*, Imprimerie Nationale Librairie Adrien-Maisonneuve, Paris 1959, 'Acmat' ¹, pp.10-11.

21. 愛宕前掲書（1）pp.217-19.

23. 前掲ベネデット校訂本では、最初の3行がFGから取られたフビライの年間スケジュールの記事と合わせてCh.95、残りがCh.96とされているが、写本ではそうした分割はない。

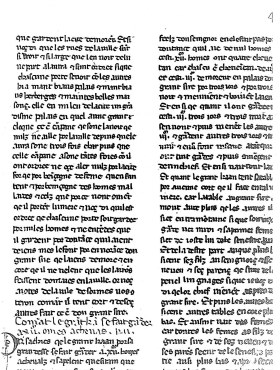
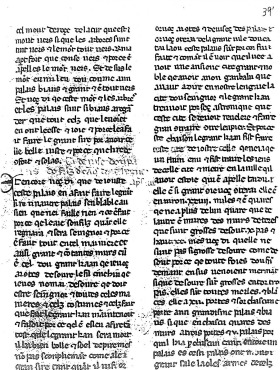
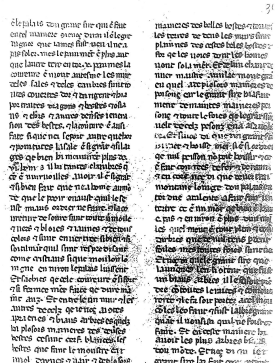
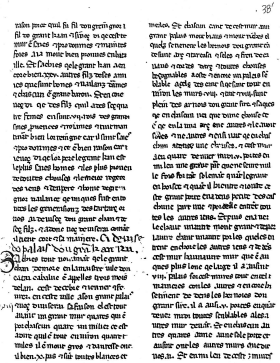
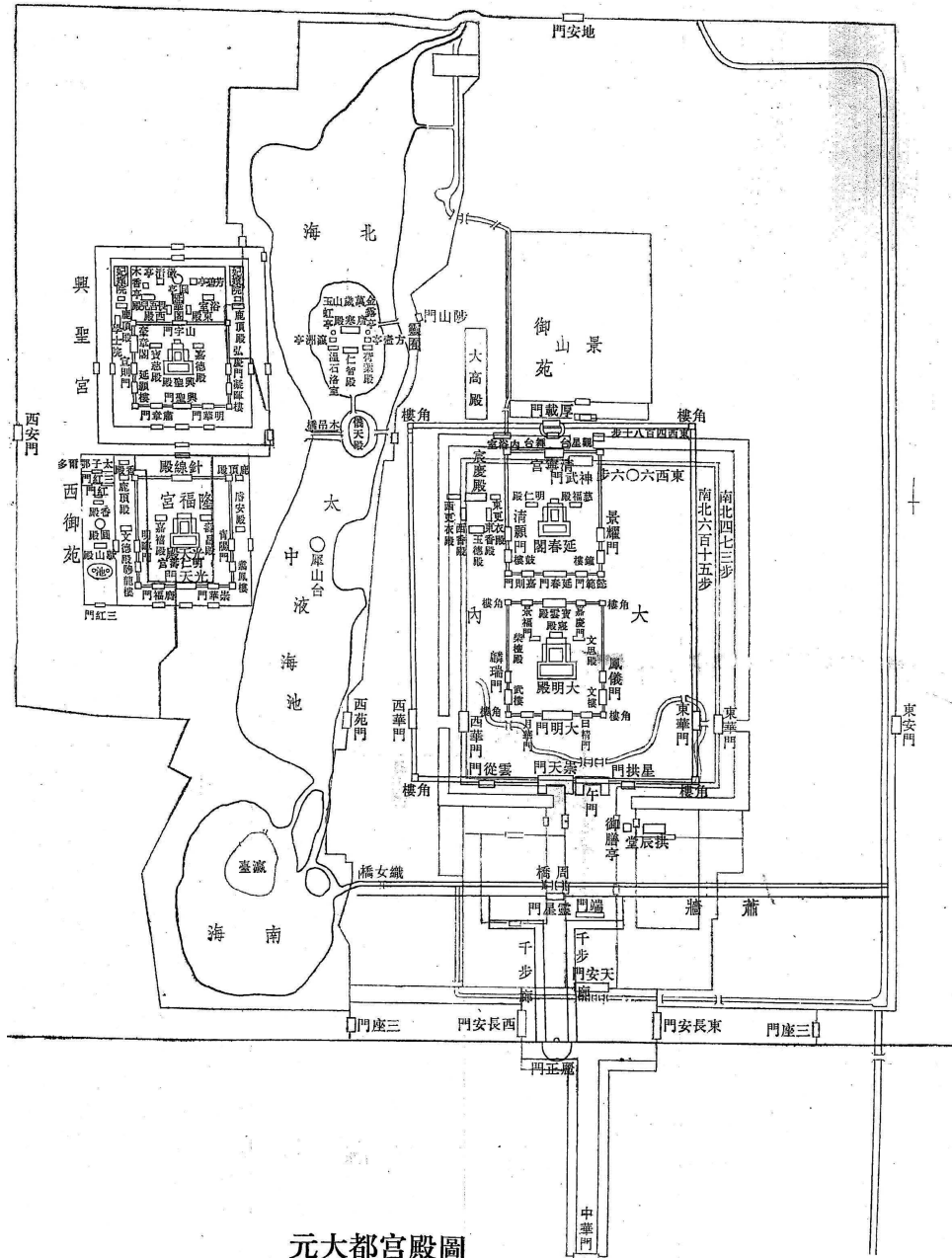


Foto ① Ms.fr.1116 (f.38va24-39va14; f.39va16-40ra25)



元大都宮殿圖

底稿根據清光緒三十四年當琦測繪北京精細全圖
元宮殿根據陶宗儀輟耕錄及蕭洵故宮遺錄

Foto ②「元大都宮殿圖」(朱傑)



Foto ③ 濟山大酒海（筆者攝影）



Foto ④ 外城遺址（筆者攝影）



Foto ⑤ 外城東南角樓遺跡（筆者攝影）

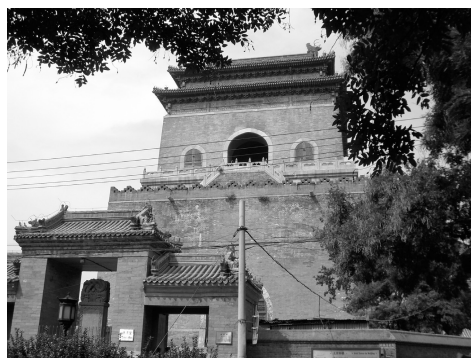


Foto ⑥ 鐘樓（筆者攝影）